

搬送ラインおよび分析機器更新に伴う運用変更の効果

◎藤井 知佐子¹⁾、三栖 徹也¹⁾、早田 峰子¹⁾、井上 賢二¹⁾、川野 祐幸¹⁾
久留米大学病院¹⁾

【はじめに】

当院では、2022年5月に生化学・免疫部門で使用している検体搬送ラインおよび分析機器の更新を実施した。

「バックアップ体制および時間外検査体制の再構築」を目標に掲げ、見直しをおこなったので報告する。

【検体前処理装置および検体搬送ライン】

MPAM+、CLINILOG V4、STraS(A&T)

【搬送ライン接続機器】

Labospect008 α (日立)2 モジュール連結タイプ×2 機。

Cobas8000 e801(ロシュ)×2 機。

LUMIPULSE L2400 (富士レビオ)×2 機。

Accuraseed(富士フイルム和光純薬)×1 機。

【機器更新後の効果】

更新から約1ヶ月が経過し、検査遅延につながる事例は発生していない。バックアップ体制を整えた機器については、業務時間中に1台ずつ試薬交換などのメンテナンス作業が可能となり、業務効率化に繋がっている。また、時間外検査専用機器として使用していた

Labospect008 α (1 モジュール×1 機)の廃止および24時間稼働のAccuraseedを搬送ラインに接続することにより機器集約がなされ、業務効率化が図られた。時間外検査では、本検体搬送ラインを使用する事により、開栓作業や検体収納が自動化され、感染防止や作業手順の削減につながっている。さらに、時間外では測定していなかった腫瘍マーカーなどが24時間測定可能となり、時間外の呼び出し検査や未検査検体の保管作業などの負担も軽減した。

【まとめ】

今回の機器更新では、ほぼすべての検査についてバックアップ体制を構築することが出来た。今後、機器トラブル等によるダウンタイムは大きく減少するものと期待できる。しかし、ほぼすべての検査を24時間体制としたため、分析機器に搭載されている消耗品や測定する管理試料の使用量増加に伴うコストアップ、また、時間外に勤務するスタッフの教育が今後の課題である。

連絡先：0942-35-3311(内線 6062)